

現代の俺の家にアニメのキャラが来ちゃった

ヒロケン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一人の男の元に様々なアニメやゲームのキャラが現代に来ちゃった話です。

今の所はリリカルなのはだけですけどどんどん増えていきます。

目次

第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
29	22	19	16	10	7	1

## 第1話

どうもはじめまして俺の名前は廣澤健太ーヒロサワケンターで歳は21歳です、俺は今では会社に通い一人暮らしをしています、親とは離れて暮らしてるし兄妹達はそれぞれ自立しており俺も普通に暮らしていました、一様趣味はアニメ観賞とゲームと読書と家事ですね、休みは殆どゲームと読書に時間があれば新しい料理を作ったりしています。

さて、これまで俺のことを話していましたが、何と俺の家(マンション)の入り口にあり得ない人がたっていました。

? 「あの、すいませんここはどこでしょうか?」

? 「知らないかな?お兄さん?」

なんととあるアニメに出てくるキャラがいたのである。

健太「…………あの、すいませんもしかしてコスプレの人でしょうか?」

けど今時そのキャラのコスプレをしている人はいませんが……………」

? 「?コスプレ?何のことでしょうか?」

健太「いや、だって……………」

リニスとアリシア・テスタロツサですよね、そのコスプレ。」

そう、何といたのはリニスとアリシア・テスタロツサ(見た目は20歳前後)のコスプレをした人だと思ったからである。

この二人は数十年以上前に流行っていたアニメ魔法少女リリカルなのはシリーズに出てくるキャラだからだ。

リニス(?)「たしかに私はリニスですが、なんでその事を知っているのですか?それにアリシアのことも。」

健太「…………何か事情がありそうですね、よろしければ俺の家で話しませんか?」

リニス「……………分かりました。」

俺はマンションに入り最上階迄(マンションの階は80階で高さ400呎で住人は一階5部屋で最上階は丸々部屋になっているため396部屋ある。)エレベーターを使って上がりそれから俺の部屋の

リビングに案内した。

健太「それじゃ詳しいことを聞きたいでまずはそっちから聞かせて貰えるかな？」

リニス「分かりました、まず私はとある人に側使いをしていましたがそこで私は死んでしまったのですが次に目が覚めたらあなたにあっつきつきのところで起きてすぐ横にアリシアがいたということです。」

健太「……………（もしかしてプレシアの契約が切れて消えてしまったがいつの間にかこつちに来てしまったということか？けどだったらなんでアリシアが大人の状態で見つかったんだ？アリシアは子供の頃に死んでいるはず。）それでアリシアのほうは？」

アリシア「私は小さい頃死んじゃったけど霊体として暫くさまよっていたけどリニスもしていったけどリニスがいなくなってすぐに意識がなくなって気付いたらここにいたの、おまけに体も大きくなっていたし、それに知識もなんで色々知っているし。」

健太「……………そういうことか、なら次は俺からだね、まずなんで君たちのことを知っているのかは君たちがこつちではとあるアニメが昔流行っていてねそのアニメに君たちが出ているからだよ、ちよつと待っていてね、その証拠にBD持つてくるから。」

そうして俺は部屋からリリカルなのはシリーズのブルーレイを持ってリビングに戻りそれを見せてフェイトが出てきたら二人とも動揺していたのだ。驚いてるところに俺はある仮説をたてた。

健太「（もしかしてこのアニメの死んだ人がこつちに来てしまったということかな？それでアリシアは生きていたら多分この位の年齢だからこの姿になったというなら納得がいくな、だとしたらもしかしてあとプレシアとリインフォースとティータとクイント迄もがこつちに来てしまっているかもしれないな。」

俺は二人がアニメを見ている間に俺の親父である廣澤圭介に電話して事情を話して協力してもらうために話した。

ちなみに父は警視総監で母はその副官である。

警察ならばそういう情報は持っているかも知れないと思い連絡し

たらなんとすでにそれらしき人が保護されているらしい、その人は予想通りプレシア・テスタロッツサだから俺のマンションに送ってくれるらしいのでその間に俺は親はここで一緒に事情を一緒に聞くついでにご飯も食べるらしいので準備を始めた。

二時間ぐらいしてからリニス達は全て見終わり親父達も来て部屋に案内したらなんとプレシアと一緒にリインフォースまでもがいた、何でも向かう途中で俺の話した人らしき人がいたのでつれてきたらしい。

俺の部屋に案内してプレシアがアリシアを見つけてお互い固まってしまったが再会を喜んでいた。

俺達は一旦ご飯を食べて事情を聞くことにした。

健太「それじゃ聞きますね、まずプレシアさんから。」

プレシア「分かったわ、まずは私はとある病気にかかっていたけどアリシアを蘇らせるために無茶な研究をしていたけどとあるプロジェクトに関わってアリシアのクローンをつくってねそれから……………」

ここから先はアニメで語られたことなので省きます、内容が気になるのなら”魔法少女リリカルなのは”を調べてください。

プレシア「……だけど私はフェイトを一人の娘として見たかったけど私は長くなかったからこの事件をおこして私は死んだけど、気付いたらこの世界にいたの。」

リインフォース「次は私だな、私は……………」

こちらの話しもリリカルなのはA'sと同じ内容です。

リインフォース「それで私は消えたのですが、気付いたら体があり、このお二方にここにたつてきてもらいました。」

健太「そうですね、どう思う？父さん、母さん。」

俺は父の圭介と母の愛美に聞いたら

圭介「にわかには信じがたいが嘘をいつている訳ではないな。」

愛美「そうね、けどそれよりもこの人たちは多分もう元の世界(?)

には戻れないと思うしこっちで生きていく必要がありますね、ちようどいいし、健太、こもマンションに住まわせてあげたら？部屋はまだ誰も住んで居ないでしょ？こっちで戸籍は用意するし。」

健太「うん、それがいいと思うけど、皆さんはどうしますか？もしも帰れる方法があるのなら構いませんが。」

プレシア「……………申し訳ないけど帰れる手段はないのでこちらで住まわせて貰いたいです。」

健太「構いませんよ。」

リニス「けど、管理人にはどう説明するんですか？それに私達はお金を持っていませんよ？」

健太「ん？あくそつか話していなかったね、俺はこのマンションを建てた物で同時に管理人でもあるんですよ、まあ、まだ建て終わって二週間しかたつてないので住人の募集はしていませんよ、それに俺はフリーの建築家でもあるのでどうということじゃないですよ、暫くは俺が養えると思いますよ。」

俺は建築家で成功して数々の建築を携わり収入を得ている。(ちなみに年収600万ちよつと。)

それを聞いた皆は啞然としていた、たしかに家の一家全員平気で年収500万は稼いでいるからな……………。

健太「だから気にせずに、けど落ち着いたらさすがにそれぞれ稼いで貰うからね、いつまでも養える訳じゃないからね。」

それを話して他の皆には下の階の好きな部屋に住まわせた。

皆が住みついて丁度一月過ぎて今度は親父達がティードとクイン

トがこつちにきた。

それに例に漏れずに事情を話して一緒にすむことになってプレシア達最初に来た人たちは働き始めた、テストロツサ一家は近所にbarを建ててそこで三人でやっているし、リインフォースは母と一緒に父を支えている。

それから一月過ぎてティーダは警察官になりクイントさんはテストロツサ一家の手伝いを始めた。

この暮らしが続いてとうとう半年が過ぎて今度は俺の考えが覆させられることぎ起きていた。

？「ねえ、フェイトちゃんこつて地球だよね？」

フェイト(？)「そうだとおもうけど……………」

？「何や、何処の県やろか？」

なんといたのは高町なのはとフェイト・T・ハラOWNと八神はやてがいた。

健太「(なんで彼女達までここにいるんだ？こつちに来るのは死んだ人だけじゃないのか？いや、まてよもしかしてアニメで語られなかった後に事件が起きて死んでしまったのか？それなら納得出来るが……………まあ、とりあえず事情を聞くしかないか)すみません何か困りごとですか？」

？「あ、すみませんこつて何県ですか？私達は適当に車で様々な所に行っていたのですが、ここは何県か分からなくなっちゃって、教えて貰えますか？」

健太「ここは神〇×県△浜市□☆町ですよ。」

？「ん、分かったわ、ありがとな(聞いたことないな、もしかして



私達は別の次元に来てしまったのかな?。」

フェイト(?)「(そうかも知れないね。)」

健太「……………もしよろしかったら話を聞かせて貰えますか?あなた達のような人が実は俺のマンションに住んでいるのですよ、もしかしたあなた達の知り合いかも知れませんか。」

?「……………分かりました。」

俺は俺のマンションに案内してリビングに案内して俺のマンションの住人を皆呼んだ。

まずは皆が来るまでに自己紹介したらやはり高町なのはとフェイト・T・ハラオウンと八神はやてだった。

自己紹介し終わったら皆が来たのでリビングに案内した。

フェイト「え?……………母さん?それにリニス?」

プレシア「フェイト!?!なんでここにいるの!?!」

はやて「……………リインフォース?……………」

リインフォース「はい、久しぶりです我が主。」

それぞれ驚いていたけど喜びあつて抱き締めあつていた。

## 第2話

再会を喜びあって事情を聞いたら三人とも俺と同じ年で部屋で寝ていたらここに来てしまったらしい、けどこの人たちが来てしまったのでこれからは生きていた人たちも探さないといけなくなり大変そうだった、そのことを親に話して一緒に探すことにした。

それと彼女達は俺のマンションにすむことになったけど、何でか高町なのは俺の部屋で住みたいとか言い出してそれにアリシアとフェイトとはやてがダメ出しをしていた、しかも顔を赤くしながら。勿論それは却下してそれぞれ部屋を与えた。ちなみにアリシアは一人部屋で俺の一つしたの階でなのはとフェイトとはやてもそのお隣に住むことになっている。(他の人達は40階程を中心に住んでいる。)

あれから数日過ぎて俺の元に新たにティアナとスバルにギンガとエリオとキャロとストライカーズに出てくるキャラとはやての守護騎士であるヴォルケンリッターが現れた。

勿論事情を話して皆に会わせたけど、何とティアナ達はVIVIDの頃の姿で向こうでは普通に高町なのは達は暮らしているらしい。

仮説をするなら、おそらく魂だけがこっちに来て肉体は向こうではこれまでどうり暮らして魂はこっちで体が出来上がってこっちにきたと思う。

もしかしてシリーズごとに来ているのか?と思うけどもしかしてシリーズ全ての主要キャラ全員来るかも知れないなと思った。

結果だけ話すと見事に主要キャラのほとんどの人が来た、まずはハラオウン一家とカリムにルーテシア親子とヴィヴィオとアインハルトとコロナとリオにジークリンデにマテリアル達とユーリまでもがいた。

一時期混乱したけどもう、おそろく来ないだろうと思ひ話したりした。

リリカルなのはの人が新たに來てから一月たったので働き始めた、まず高町なのははフェイトとはやと一緒に喫茶店を開いてアインハルトとコロナとリオとジークリンデは親が居ないので俺が養子にして娘達のヴィヴィオとコロナとリオは近くの学校に小学校四年生にて編入して、アインハルトは同じ学校の中等部に通い、ジークリンデには高校に通ってもらうことにした。

それとハラオウン一家はテストタロツサ一家のbarで働くことにしてカリムはなのはの喫茶店を手伝いルーテシア親子はマンションの管理人の手伝いをしてもらいマテリアル達はユーリと共にレストランを開いた。

これでようやく落ち着いて暮らせるよ。



### 第3話

なのはにデートに誘われて俺は決められず考えていたら

はやて「なのはちゃんだけずるいで、私もデートしたい／／／／／」。

フェイト「はやてまで!? だったら私も／／／／／」。

アリシア「ずるいよそれだったら私ともデートしてほしいよ、健太／／／／／」。

ティアナ「あの……出来れば私も／／／／／」。

スバル「私もしたいよ」。

カリム「それなら私も／／／／／」。

なんと他の女の子にも誘われてしまった。

結局俺は断れず皆とそれぞれデートすることになった、それで順番は最初なのはで次にフェイト、ティアナ、スバル、はやて、カリムとなった。

デートが決まりバーベキューから数日、漸くデート出来そうになったので準備をしている。

健太「今日はたしかなのはとだったよな、けど本当にデートプラン考えなくてよかったかな? なのはは任せてって張り切っていたけど……ま、いいか。」

俺は今は春ということとで爽やかな格好で待ち合わせの駅前に向

かった。

「なのは sideler」

今日は念願の健太君とのデートと言うことで張り切ってデートプランを考えて今時のファッションの服を選んで着ています。

それからなんで私は健太君をデートに誘ったのかは、私達はミッドに住んでいてヴィヴィオと一緒に住んでいてこれまで誰かを好きになったことはこれまでいなかっただけ健太君にあっつて一目惚れしちゃって／＼／＼／＼それから私は健太君のことばかり考えてしまつて仕事場である喫茶店も健太君が新たに建ててくれたし、喫茶店に来てくれた時はいつもドキドキしている。

それに彼はこっちに来てしまつて不安になっていたけどそれを彼が助けてくれた、それだけでも嬉しかった。

あと私達のことを知っていても一人の普通の女性として接してくれた、これまではエースとしてとか管理局としての私を皆は色眼鏡で見えてきて辟易していた。

それよりも待ち合わせの駅前に10時ということで私は楽しみすぎて二時間ほど前に家を出た。

駅前に8時半前についてしまつてまだ彼は来ていない、それで暫くまっついていて約束の時間の30分前に来てくれた。

健太「あれ？なのは早いね、もしかして待たせちゃったかな？」

なのは「ううん、私も今さっき来たところだから気にしないで。」

私はとつさに嘘をついちゃったけど気にしてない、けど春ということとでまだ寒くて手が冷えきつてしまった。

これじゃ手を繋げないよ、と思っていたら

健太「……………それじゃ行こうか、けどここ最近寒いから俺の手、ここまで来るのに冷えきつてしまったなから……………」

なのは「……………え?。」

なんと健太君は私の手を繋いで彼のポケットと一緒に入れてくれた、その手はとても暖かくて冷えきっているなんて嘘だったけどおそらく私が嘘をついていることを知ったのだろうけど私のことを思っ  
てやってくれたことがとても嬉しくて顔が暑くなっちゃった。

健太「それじゃなのは、案内してくれるかな?俺はなのはに言われた通り何も考えてないから任せるよ。」

なのは「うん、行こう健太君／＼／＼。」

私達は手を繋いだままデートを始めた。

あれから電車に乗って町中に来てまずは映画を観に行って楽しんで映画館にあつたカラオケに来た。

なのは「それじゃまずは私から歌うね。」

健太「分かったよ。」

それで私が歌う歌は

小さな花を

私が歌い終わったら健太君は

健太「……………。」

なのは「あ、あれ?健太君?どうしたの?」

もしかして上手くなかったかな?と思ったら

健太「あ、ごめん、歌っているなのはを見ていたら見惚れちゃった

／＼／＼。」

なのは「え!?えつと……その………ありがとう／＼／＼／」  
健太君は私が歌っている姿が見惚れちゃった見たいで顔を赤くして答えてくれて私も嬉しくて顔を赤くして頷いた。

健太「それじゃ次は俺が歌わせて貰うね。」

なのは「う、うんどうぞ」

健太「それじゃ………これでいいか。」

### 小さな恋の歌

健太君が歌ってくれたのは恋愛ソングで健太君の歌声はとても暖かくて心がポカポカしてくる、なんとというか上手いという訳じゃなくて感情的で歌っている感じだ。

健太「ふく、どうだったかな?」

なのは「うん、凄く良かったよ。」

そのあとは交互に歌ってカラオケを出た。

次に向かっているのは服屋で今度は健太君の好みを知りたいと思いい見に来た。

なのは「それじゃ健太君出来たら私の服を選んで欲しいの、いいかな?」

健太「俺が?別にいいけどあまりセンスないかもしれないけどいいかな?」

なのは「うん、出来れば私に似合いそうな服を選んでほしい。」



彼がそれを聞いて服を探してくれて持ってきたのは白を基調に青い線がはいっている可愛らしいワンピースを持ってきてくれて私はそれを試着室に持って行ってそれに着替えて健太君に見せた。

なのは「どうかな？似合ってる？」

健太「……………あ、うん、とても似合ってるよ。」

なのは「えへへ／＼／＼／＼。」

そのあとは何着か着てみて似合っている服を選んで買ったたりした。

服を選んで夕方になったので高台に来た。

ここはデートの有名なスポットで夕陽が綺麗なところだ、だから一緒にきたのだ。

健太「この夕陽は綺麗だね。」

なのは「そうでしょ、私も偶然見つけたの。」

健太「うん、とてもいい場所だよ。」

私達は夕陽を見ながら話したりした、それで夕陽が見えなく頃に帰ろうとしたら

？「え？……………なのは？」

なのは「え？」

呼ばれたきがして振り向いたら

？「やっぱりなのはちやんだよね？」

そこにいたのは金髪の髪をショートボブにした女性と紫色の髪の女性がいた。

なのは「もしかして……………アリサちゃんにすずかちゃん？」

そこにいたのは私の親友のアリサ・バニングスと月村すずかだった。

健太「それじゃ君たちも目が覚めたらさつきまでいた所に居たんだね。」

アリサ「ええ、けどよかったわ、気付いた時になのはの近くにいて。すずか「うん、そうだね。」

とりあえず二人を俺の家によんで事情を聞いたらやはりなのは達と一緒にということが分かった。

健太「それじゃ相談だけど二人ともこのマンションに暮らすかい？」

ここには君たちの知り合いも沢山いるからね、どうかな？」

アリサ「私はここになのはと一緒に暮らすわ。」

すずか「勿論私も。」

健太「それじゃこれからも宜しくね。」

## 第4話

なのはとデートしてからはよくなのはと話すようになった、それとなのはからのアプローチが増えてきた、最初は俺の部屋にきて掃除とか家事等をしてくれるようになったしよく料理のお裾分けに来てくれるし仕事に向かうとたまに弁当を用意してくれる、おまけになのはが作るシュークリームも美味しいと正直他の人の好意な人がいなかったら告白しそうと思える人だが他の人の好意も無下に出来ないと思つてしまい今の関係が続いている。

そのあとは俺とフェイトとの休みが合ったのでデートの準備を始めた。

ーフェイトsideー

今日は私と健太とのデートの日です、それで今日の予定はまずは公園で待ち合わせて水族館に行く予定です。

それと私なのはとはやとふたりと一緒に来たので不安はなかったけど心配していたら彼が話しかけて来てくれて最初はここに住んでいる住人かな?と思つていたらなんとその人がいうには私達と似たような人がいるらしいのでついていったら彼の住んでいるマンションに案内してくれてリビングで話していたら誰かが訪ねてきて健太が案内したのは、なんと昔死んだと思つていたプレシアとリニスと私に似ている女性とリインフォースとあつたことがない人たちだった、私は母さんとリニスに会えて喜んで喜んだ。

それで私は白黒の服に青の上着に白いスカートと爽やかな服を着ている、それと彼女の完璧なプロポーションにより、より可愛くなっ

ている。

準備の為に今日は弁当を作っている、最近なのはが弁当を作っ  
ていて羨ましいと思っ作っている、今日の予定はこの間水族館の  
チケットを買ったのでそれを使って一緒に行っ楽しんで予定だ。

弁当を作り用意が出来たのは朝8時半と待ち合わせの10時まで  
時間があつたのでテレビをつけた、そしたらちょうど占いがやってい  
た。

『今日は名前がは行の人は超絶ハッピーの日でしょうしかも恋愛に対  
してはもつと積極的にいけばより親密になれるでしょう。』

フェイト「積極的／／／／／。」

私は占いを聞いて顔が赤くなっちゃった。

そのあとは暫くテレビを見ていて9時になったので待ち合わせの  
公園に向かった。

約20分ほどかけて着いたらすでに健太は待っていてくれた。

フェイト「あれ!?健太もしかして待たせちゃったかな?」

健太「いや、今さっき来た所だよ、それにもかしたらフェイトな  
ら多分早めに出るかなと思っ早めに来たんだよ。」

フェイト「そうだったんだ、ありがとね。」

私が微笑んだら健太は何故か顔を赤くして視線を外したけどどう  
したのかな?

フェイト「健太?どうかしたの?」

健太「いや…………その…………フェイトの微笑みが綺麗で見惚れちゃっ  
て／／／／／。」

フェイト「ふえ!?!／／／／／。」

健太が言っ事嬉しく顔が暑くなっちゃった。

健太「……………それじゃ行こうか。」

フェイト「うん。」

私は返事をして朝の占いを思い出した、それで私は健太の横につい

て彼の腕を抱き付いて手は恋人握りで胸を押し付けるようにした。

健太「え!?! フェイト／＼／＼／＼／!?!」

フェイト「えっと……………駄目かな?／＼／＼／」

健太「いや……………駄目じゃないよ／＼／＼／」

そのあとはそのまま水族館に向かった。

暫らく歩いて水族館に着いたので一緒に入って色々見ている、勿論その間も腕に抱き着いたまま。

最初は色々な魚を見ながら楽しんでお昼前にイルカのショーが始まったので見て見終わった後水族館を出て芝生がある公園に来た、そこで弁当を食べるためである。

フェイト「健太、実は弁当作ったから、食べてくれるかな?」

健太「勿論、頂くよ。」

そう言って健太は食べてくれた。

健太「うん、とてもおいしいよ、フェイトは将来良いお嫁さんになれるよ。」

フェイト「ふえ!?!／＼／＼／」

其の後は食べ終わってから町に行って買い物とかしてデートは終わった。

## 第5話

フエイトとデートをしてからは他の皆ともデートをしてそれ以降は普通に暮らしている、正直皆の好意は嬉しいし俺の住む日本は数年前から一夫多妻等が可能なので困らないが、俺がそれを踏み込めず過ごしている。

それで学生の皆の夏休み前に俺は仕事を終わらせて帰ってきたら、なんと、俺の好きなアニメのキャラクターがいたのだ。

？「和ちゃん、ここって何処なんだろう？」

？「分かんないです、それに優希とか部長もいないし。」

？「困ったわね、けど知っている人がいて良かったわそれだけでも安心出来るし。」

？「だが、これはこれで楽しそうなのだ！」

俺の前にいるのはアニメ咲—s a k i—に出てくる宮永咲と原村和と福路美穂子と天江衣だからだ、なんで別のアニメの人もこっちに來ているのだろうか？

もしかしてこれからも別のアニメのキャラクターが来るのだろうか……と考えてしまう。

と呆然としていたがいい加減話さないといけないと思いきつて話してみた。

健太「すいません、もしかして何か困りごとですか？」

咲「え？あくはい、実は……………」

彼女達から聞いたらどうやらなのは達と一緒に寝ていて起きたらここにいたらしい。

それで俺も事情を聞いて。

健太「だったら俺の暮らすマンションに来ますか？部屋ならまだたくさんありますし俺もあなた方を養える立場にあります、それでどうですか？それに戸籍とかも俺の父が警視總監なので用意できますよ。」

美穂子「……分かりました、よろしくお願いします。」

承諾してくれたので早速俺はマンションに案内して部屋の案内し

てそれから俺は親にまた事情を話して別の人を探してもらった。

咲のキャラクターの人が来た翌日早速見つけたらいいのでつれてきて貰ったのは他の清澄の片岡優希と染谷まこと竹井久と須賀京太郎も無事見つかりそれから龍門渚高校の他の皆に風越女子の他の面々も来ているしその他にはなんと鶴賀学校の一人を除いた皆も見つけたがなんとその見つからなかつた一人の東横桃子は俺が見つけた、しかも見えると知ったからなのかめっちゃ俺になつた、確かに影は薄いけど何で見つけられないのだろうか。

気を取り直してその他は阿知賀学園の皆と千里山高校の皆に永水高校の皆に白糸台高校の皆も見つかつたのだがさすがに全てを養える訳ではないので保護者は俺がなりお金は親と兄弟姉妹に協力してくれるといってくれたのでそれに甘えてなのは達も何かと協力してくれるといってくれたのでそれで何とかしようと思った。

それで関係ないけど何でか松実宥と園城寺怜と宮永姉妹と天江衣と福路美穂子と東横桃子がめっちゃ俺の好みとか聞いてくる、しかもそれとは別になのは達とにたように俺に好意を寄せているみたいだ、正直これ以上増えるのは困るな……………

あれ？これってフラグかな？

咲のキャラクターが皆きて数日後とうとう夏休みになったので俺は皆と海に泊まり込みで行こうと思いい皆が都合がいい日が8月のお盆前が丁度いいらしいのでそれに向けて準備をしていたのだが、なんとまた別の作品のキャラクターがいたのです、やっぱりあの時のがフラグになってしまったのかと思ってしまった。

それで見つけたのは刀使ノ巫女にでてくる主要キャラが皆が来たのだ、本当に勘弁してほしい。



## 第6話

刀使ノ巫女の人が来てまず聞いたのはいつの頃から来たのか聞いたら燕結芽は死んだ直後でそれ以外は無事中学校を卒業して高校もでて社会人なんだそうだ。

それで親衛隊の二人は結芽と再開できて喜んでいた。

それで俺はこれまで通りに皆に戸籍とマンシヨンの部屋を与えた。

けどもしかしたらこれから他のアニメのキャラクターも現れるかも知れないと思いい家族全員に言つて協力を頼んだ。

それから柳瀬舞衣と此花寿々花と燕結芽になつかけました、何でさ。

あれから数日後ようやくお盆になったので俺の家族全員俺のマンシヨンに来ていた。

健太「姉さん達に兄さん達にかすみとらんに玲哉に權久しぶり。」  
今挨拶したのは俺の2つ上の双子の姉の菊姉さんと母姉さんに4つ上の兄の幸一兄さんに3つ上の総司兄さんに俺と同じ年で妹のかすみと一つ下のらんにその双子の弟で玲哉に2つしたの權で俺達家族である。

菊「久しぶりね、健太、元気にしていた？」

菊姉さんは医者の仕事をしていて執刀医もしている凄腕の医者でシヤマルと一緒に仕事をしている。

仕事の時はしっかりしているけどそれ以外はぼんやりしている。

母「はあ~~~~~やっつっつっつと健太と会えたよ~~~~~!!!」

そういつて抱きついて来た母姉さんはモデルの仕事をしていて誰

が見ても美人と言えるような人でおまけにフエイト並にダイナマイトボディなので俺にくつついている時に胸がめつちや押し寄せてきてドキドキしている。

幸一「こらこら、苺そんなに抱きつくな、これから五泊六日のお泊まりなんだから、いくらでも甘えられるだろう。」

苺姉さんを離しながら話した幸一兄さんは建築をしたりする仕事で社長何だけど率先してやるので渾名は”働く社長”である。

総司「ははは、健太も相変わらず大変そうだな。」

苦笑いした総司はスポーツインストラクターの仕事をしている、おまけに助っ人として様々な力仕事をしていたりする。

かすみ「久しぶり健太、もしかしてまた大きくなってない?」

かすみは主に服のデザイナーで様々な服を作って売ったりしている、それに最近の若い女性にとてつもなく人気なんだとか。

らん「兄さん久しぶりです。」

らんは今看護師の専門学校に通っている。

玲哉「兄様この所はどうですか?」

玲哉はアイドルで稼いでいて人気絶頂だ。

權「それよりも早く行こうよ、皆待っているんじゃないの?」

急かした權は早〇田大学に通う主席である、特に夢はないけど大きな会社に通いたいらしい。

健太「仕事とかは順調だよ、皆も元気そうだね。」

俺は皆と再会してたら父さんがバスを手配してくれていたのが来たので皆を呼び乗り込んで別荘に向かった。

なのは「これから行くところはどんな所なの?」

健太「これから行くのは〇ノ島の少し離れた沖合の近くにお爺ちゃんが買ったプライベートビーチがあってね、そこに俺が設計して幸一兄さんの会社が建てた別荘があるんだよ、そこには俺のお爺ちゃんもいるからね、皆にも紹介するよ。」

はやて「プライベートビーチやって!?健太君のお爺ちゃん何者なんや?」

健太「まあ、お爺ちゃんは俗にいうホテル王でね、それにより年収

はすぐくてね、俺の誕生日の度に凄く豪華な物をくれたなく。」

一番驚いたのが俺が車の免許を取ってはじめての誕生日の時にくれたのが世界で三台しか作られなかったラン○ルギー×ヴェ△ノである、値段はなんと調べて見たら四億三千万程である。

確かにラン○ルギー×カツコいって言っていたけどまさかこんな高いのを買うとは思わなかったなく。

ちなみに車は俺の地下駐車場においていて仕事に向かう時に乗っている。

暫くしてようやく別荘に着いたので早速お爺ちゃんに皆を紹介して水着に着替えて海に遊びにいった。

皆それぞれ楽しんでくれて誘ったかいがあつたなと思つたら昼頃になつたので俺は弘文お爺ちゃんの所にむかつた。

健太「お爺ちゃん、もうお昼やでこの前話した海鮮系のものあるかな？」

弘文「そうじゃの、確か別荘にあつたはずでな、その地下にあるからそれをもってこればいいじやろ。」

健太「ありがとう、それじゃ用意するね。」

幸一「それなら俺も運ぶの手伝うよ。」

健太「ありがとう幸一兄さん。」

早速俺と幸一兄さんと一緒に別荘に戻り俺はバーベキューコンロとかを運び幸一兄さんは海鮮などを運んで貰い準備が出来たので皆を呼んで食べたりした。

苺「健太くはいい、あくくくん。」

健太「苺姉さん俺は自分で食べれるよ。」

苺「いいじゃん健太くあくん。」

健太「……………はあ、あくん。」

俺は苺姉さんから色々あくんをされながら食べたりしてそのしている間俺に好意を寄せている人が羨ましながら見ていたり苺姉さんを睨んでいる人もいた。

その後は皆からもあくんをされながら食べたりしてお昼を食べてまた皆で夕方まで遊んだりして別荘に戻った。

そのまま皆で風呂に向かって夜まで過ごしてでてから今度はカレーを作りおきしていたのでそれりを食べて俺は別荘のリビングで疲れて寝てしまった。

菊side

私は今健太が寝たので最近健太のマンションに暮らしている人と談笑して過ごしている、けどなにやら健太が養子で養っているコロナちゃんが聞いてきた。

コロナ「所で最近お義父さんが寝ている時にたまに魘されていてその時にく桜……………ごめん」とか言っていたのですが、桜って誰のことですか?」

廣澤家「!?!」

私は驚いていた、けどこれは……………話していいのか、と悩んでいたら幸一兄さんが。

幸一「……………これから話すことはとても重たいことだけど聞きたいかい?」

幸一兄さんが聞いたら皆真剣な表情になって頷いた。

幸一「分かった、話すよ、まず桜っていうのは健太の双子の妹の名前だよ。」

舞衣「双子の妹？」

幸一「そうだよ。」

なのは「へ〜双子の妹がいたんだ、けど一度も会ってないよね。」  
フェイト「うん、幸一さん達の事はたまに聞いたりしていたけど聞いたことないね。」

幸一「そうだね、その理由はもう既にいないからなんだよ。」

はやて「いないって……………!?もしかして……………」

菊「そうだよ、桜は17年前に心臓の病気で亡くなったのよ。」

皆「!?!」

皆驚いていた。

幸一「続けるよ、桜は生まれた頃から体力とかなくて殆どをベッドとかで寝たきりの生活をしていて、健太は毎日飽きずに桜と話したりして楽しかったこととか色々話したりしていたんだよ。」

圭介「そこからは俺が話そう、それが三才になるまで続けてそれどうとう桜が心臓の病気になってしまっただけ、健太は毎日毎日病院にお見舞いに行つて励ましたりして<頑張れ桜、元気になって一緒に遊ぼうな、それで学校と一緒に行って桜の夢のお嫁さんになろうな。>つてずっと励ましたりしたんだ、けど病気はどんどん悪化していつて最後には声が霞むぐらいになってな、それで桜と健太の誕生日の一週間たった頃にな、とうとう医者から最悪な事を聞いたんだ。」

なのは「それって……………」

圭介「多分察しのいい皆は気付いていると思うけど、医者から……………」

あと3日しか持たないと思われまますから家族全員悔いのないよう

にしてあげてくださいって言われてね。」

皆「!？」

圭介「その後は桜に好きな事を3日してあげて悔いのないようにしてあげたよ、それでとうとう3日たって、桜も苦しそうに寝てね、それで最後に健太にとある事をいったんだ。」

皆「……………」

圭介「それはね……………私はもう駄目だからお兄ちゃんは私の分も長生きして幸せになってねっていつて、眠るように眼を閉じて笑顔のまま亡くなったんだ。」

皆「……………」

何人かは話を聞いて泣いたり落ち込んだりしていた。

圭介「その後は健太は頑張つて生きようとして俺からは武術を習い母さんからは勉強を一人で頑張つたんだ。」

幸一「その後は健太は警視總監の一人息子として頑張つたんだ。」

プレシア「?ちよつとまって!?!今聞き間違えたのか、一人息子つて。」

愛美「……………そうよ、私達夫婦の血の繋がった息子は健太一人よ。」

アリシア「え!?!それじゃ幸一さんは。」

幸一「……………俺達は元の名前は神楽なんだよ。」

幸一兄さんは皆に話したら驚愕していた、確かにそうよね。

圭介 side

総司「俺達、神楽家は15年前に両親を殺害により無くしてね、それで事件は無事解決されたけど当時俺達はまだ小学生でね、それで親戚に預かる事になったんだけど、俺達は兄妹全員で一緒に暮らしたいといったけどさすがに多すぎなのでそれぞれ離ればなれになつてしまふと決まった時にそこに圭介さんが事件を担当していてそこには健太もいたんだよ。」

圭介「ああ、それで健太はそれを聞いて、俺にお願いをしたんだ。」

回想

健太「お父さん、あのお兄ちゃん達離ればなれになっちゃうの？」

圭介「そうだね、けど仕方がないことなんだ。」

健太「……………お父さん、お願いがあるんだけどいいかな？」

圭介「なんだい？」

健太「僕、お兄ちゃんとお姉ちゃんと妹と弟が沢山欲しい。」

圭介「!？」

俺は驚いた、何せ健太はこれまで我が儘を言わずに過ごしてお願いなんて話したこともなかったのにと俺は思った。

回想終わり

圭介「その後は俺が全員引き取り養子にしたんだよ。」

愛美「それで新たな息子、娘を大事に育てわね。」

幸一「それでその後は幸せに過ごしたんだ。」

総司「それに健太には多大な恩があるから俺達も頑張って来たんだ。」

## 第7話

健太の過去を話したあとは皆泣いたり落ち込んだりしている。

菊「でも出来たらこれまで通りに過ごして欲しいのよ私達もそれを望んでいるから。」

母「まくそうだね、それに本当の家族になっちゃってもいいけどね。」

母がニヤニヤしながら健太に好意を持っている人に見てきた。

それを見た好意を持っている人は顔を真っ赤にしてうつむいた。

母「まあそれでも

第一婦人は私だけだね。」

廣澤家以外「……………え？」

幸一「本当俺の妹達は健太が好きなんだなく。」

総司「いいじゃないか、血は繋がって無いんだから。」

そう、健太の姉と妹は彼を一人の男として愛しているのである、そのために彼の祖母であり元総理大臣である廣澤一恵に頼んで一夫多妻にしてもらったのである。

そのあとは皆と健太のどこがいいとか色々話したりしてその日は寝た。

翌日俺が目を覚ましたら皆なんかよそよそしい気がしたら、どうやら俺と桜の過去の事を話したらしい、それで皆俺に気を使ったらしいのだが俺は気にせずはなしたりした。

そのあとは皆元気になってくれてめっちゃ遊んだりしてすごした。



そんなことがあつて数日、皆で楽しんで過ごしたり疲れを癒したりして過ごした。

皆とお泊まりをして楽しんでまた日常が戻ってきた。

それで戻ってから暫くして俺の仕事の繁忙期になって忙しい、それに何でかコロナとリオが何か隠しているような気がするが教えてくれない、ヴィヴィオに聞いてみたら、どうやら授業参観があるけど、俺が忙しそうということで黙っていたらしい、それで日程は明日らしい、それで俺は急遽明日の仕事を弟子の一人に任せて俺は授業参観に行くことにした。

どうも廣澤コロナです、今日は私達のクラスは授業参観だけど私達はこっちに来てからお世話になっているお義父さんは仕事が忙しうなのでリオと一緒に秘密にしてみましたけど、やっぱりお義父さんにも見てもらいたいと思っています。

ヴィヴィオやクラスメイトの皆も励ましてくれてますので大丈夫です。

授業が始まってクラスメイトの親や姉弟等が来てヴィヴィオには

なのはさんや他の社会人の人などが来てくれます。

それだけでも嬉しかったです、それで昼休み前、何やら廊下が騒がしくなってきたら教室の扉が開いてそっちを見たら

「あ、すいません、遅れて来ました。」

お義父さんが来てくれました。

俺は弟子の一人に引き継ぎをして俺は直ぐ様コロナ達の通う学校に來ています。

それで来て廊下を歩いていたら、廊下で授業を見ている人たちがこつちを見て騒いでるけど気にせずコロナ達の教室に入ったら一瞬静かになって皆が俺の方を向いたので謝りながら入り、そしたら授業を再開した。

それからはコロナとりオは嬉しそうにしてくれて俺も笑顔になり

ました。

暫くして授業も終わりお昼休みになったので食堂に皆で来ている、さすが小中高大一貫だけあって食堂も大きい、といってもこここの設計は俺が手掛けたんだけどね。

そういえば教えてなかったけどこの学校、桜ノ宮学園は俺が初めて設計をして幸一兄さんが作った学校だから、俺達のことには有名人だからか皆俺を見てきます。

それにコロナ達を編入させるときにもここを選んだのである、その事を話したら皆大層驚いていた。